

基盤教育機構

キーワード

英語学、言語学、心理言語学、音声学、音韻論、日本語、音声処理、音声変化



講師 / 英語学修士

森 直 哉

Naoya Mori

学歴

同志社大学 文学部英文学科 卒業
同志社大学 文学研究科英文学英語学専攻 博士前期課程 修了

経歴

近畿大学 経営学部 基礎教養部門 非常勤講師 同 通信教育部 非常勤講師
大阪医科大学 看護学部 英語非常勤講師
大阪経済法科大学 国際学科 非常勤講師

相談・講演・共同研究に応じられるテーマ

発話知覚 音声認識 発音指導

メールアドレス

nmori708@fukui-ut.ac.jp



主な研究と特徴

「日本語母語話者による英語音声の音声処理」

本研究は、日本語母語話者が外国語音の音声を認識して脳内で処理する際にどのような言語情報を利用して処理を促進させているのか、またどういった状況でその処理が阻害されるのかについて実験を通して研究調査するものである。聞き手が話し手の発した音声を認識する時、実際に発音された音は我々の想定するそれらとは異なり音声的な変化を経たものを聞いている。その音声的变化は同化現象と呼ばれており、日本語や英語はもちろんだ、多くの言語でその発生が確認されている言語現象である。正確には、同化現象とはある音がある音の周辺にある別の音から影響を受けてその発音を変化させることをいう。例えば日本語の「てんぶら」と「てんたい」の語における「ん」の発音はそれぞれ異なっており、「てんぶら」の「ん」は後続の「ぶ」の/p/の音の影響で[m]と発音されるが、一方で「てんたい」の「ん」は後続の「た」の/t/の影響で[n]と発音されている。これらの例のように実際には異なる音として発話されている「ん」を同一の音として私たちが認識できるのは無意識下にこれらの母語における音変化の規則の知識を持ち合わせているからである。さらには、聞き手はこの同化現象の知識をもって脳内で音声処理を促進させており、例えば鼻音の変化の仕方から後続の音を予測していることがこれまでの研究によりすでに知られている。(Gow, 2003; Otake et al., 1996) また一方で、音変化が原因で曖昧になった音の元の形を推察するのに同化現象の知識を利用しているとする研究も多く存在し、(Gaskell & Marslen-Wilson, 1996; Mori, 2013)聞き手がこの知識を大いに利用して音声処理を行なっているのは先達によって明らかとなっている。しかし同化現象の知識以外にも音声処理において重要な要素があり、その一つが音の持続時間である。例えば、フランス語においては鼻音の持続時間によって鼻音と鼻音化母音の弁別を行なっているという研究がある。(Shoemaker, 2014) それに加えて、ドイツ語とオランダ語では/v/の持続時間が大きく異なるという報告(Hamann & Sennema, 2005)や、日本語と英語の比較でも日本語の語末子音の長さが英語のそれと比較しておよそ1.5倍であるとする研究Sato (1993)がある。これらのことから、Mori (2019)では語末鼻音の長さが日本語のものと同様に長い英語の音声刺激とそれらが短い刺激を用意して語末子音の後の子音を発見するまでの時間を二者間で比較したところ、長い語末鼻音をもつ刺激への反応時間が短いものと比べ統計的に有意に短いという結果が得られた。これらの実験結果から私は日本語母語話者は英語の音声処理を行うにあたって母語と同等の語末音の長さが必要であり、ここにおいて持続時間は音声処理を行う前段階である種のフィルターのよう働きをしていると考えられる。私はこの働きをフィルター理論と名付け図1のようにモデル化を行なった。このモデルでは持続時間は母語と同等レベルの長さを持つ音のみを選択的に次段階へ通し、同化現象の知識を利用して促進効果を得るための処理を行っていると考えられる。

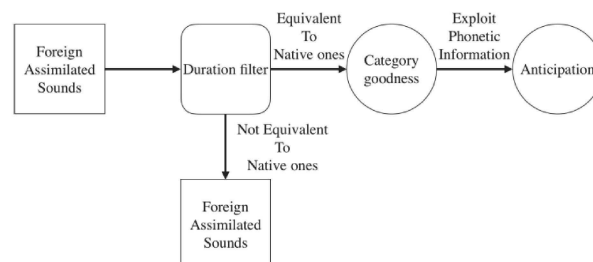


図1. フィルター理論における理論上の音声処理促進の手順

今後の展望

Mori(2019)でも示されたように、同化現象以外に音声処理を行うにあたって大きな影響を与えている要素が存在している。私はこれから、持続時間がどの程度まで短くても日本語母語話者は許容できるのか、促進処理以外の言語処理にも音の持続時間は影響しているのかについて研究を行なっていきたいと考えている。加えて、日本語母語話者以外の言語話者の場合はどうなっているのかについても調査を行いたい。例えば、英語母語話者の場合でも長い持続時間の刺激から恩恵を得ることができるのか、その他の韓国語母語話者などでも同様に彼らの母語と同様の長さが必要なのか、などについて調査を行いたい。最終的には、この研究が日本語母語話者におけるリスニングに関する諸問題の解決に結びつくことができればと考えている。

所属学会

JACET
日本音韻論学会

主要論文・著書

Mori, N. (2015). Japanese Listeners' Compensation and the Use of Contextual Information at the Segmental Level. *Phonological Studies*, (18), 59-66.
Mori, N. (2018) Research on the Processing of Nasal Sounds by Japanese Listeners, *Kindai university center for liberal arts and foreign language education journal. Foreign Language edition*, 9(2), 97-115
Mori, N. (2019) Native Japanese Listeners' Use of Assimilated Nasals in Online Auditory Processing, *JAAL in JACET Proceedings*, (1), 16-22